

ミステリ読書案内

2019. 12. 20 発行元

第 20 号 伊藤 剛

望月麻衣「京都寺町三条のホームズ」

最近の「ライト文芸ミステリ」で一番の売れ筋を考えた時、思い浮かぶのが望月麻衣。2つの大きなシリーズを持っていて、若者に大人気のベストセラーである。現在の小説の流れを知るには恰好の作品かな。

「ライト文芸ミステリ」について少し

これからも度々出てくるであろう「ライト文芸ミステリ」。この表現が、正しいのかどうかは私には判断できない。ただ、「ライト・ノベルス」と分離して呼ぶことには賛成だ。現在の「ラノベ」は、あまりにも乱発し過ぎて、なおかつ内容のレベルも差がありすぎる。「これで『本好き人間』を育てることができるのか？」と聞かれた時にイエスとは答えにくい作品群だ。

また、「キャラクター文芸」という表現も使われているが、これまた、私には違和感がある。「人物」がすべてを支配する方向性は、非常に危うい傾向だと思っている。

「京都寺町三条のホームズ」シリーズ

と、難しい話からスタートしたが、望月麻衣の『京都寺町三条のホームズ』シリーズは、話の道筋をはっきりして、とても読みやすい。1巻目を読んだ時には、文章がぎくしゃくして、いかにも「新人」という雰囲気だったが、巻を重ねるにつれてスマートになった。成長の跡がよくわかる作家だ。

「ホームズ」の題から、いかにも

“純粹ミステリ”を連想させるが、ミステリの味はそんなに濃くない。探偵役が「家頭」という姓なので、家＝ホームに、頭＝ズをくっつけた渾名のような呼び名である。

人間関係の展開が話の中心であって、そこに日常系の謎がぼつりぼつりと加えられている形。

現在、双葉文庫から12巻まで出ている。最近の数作は、ちょっと山場を越えた感じで、やや緊張感が薄れてしまった。

「わが家は祇園の拝み屋さん」

角川文庫から出ているのは『わが家は祇園の拝み屋さん』シリーズ。こちらは、現在11巻目まで進んでいる。『三条のホームズ』よりもさらにミステリ味は薄い。

「拝み屋さん」なので、さまざまな「霊」が登場する。過去と現在が入り混じった構成もシリーズ途中まではあった。京都という街の持つ雰囲気や上手に伝えようとしているところが良い。

こちらでも10巻を越えると展開がマンネリ化してくるので、今後どうやっていくのかが、ストーリーづくりとしてはポイントになるだろうと思う。

『京都寺町三条のホームズ』シリーズ

1. 京都寺町三条のホームズ
2. 真贋事件簿
3. 浮世に秘めた想い
4. ミステリアスなお茶会
5. シャーロックアンの宴と春の嵐
6. 新緑のサスペンス
7. 贋作師と声なき依頼
8. 見習い鑑定士の奮闘
9. 恋と花と想いの裏側
10. 見習い鑑定士の決意と旅立ち
11. あの頃の想いと優しい夏休み
12. 祇園探偵の事件手帖

上記の他に旅行案内としての『6.5 ホームズと歩く京都』がある。

『わが家は祇園の拝み屋さん』シリーズ

1. わが家は祇園の拝み屋さん
2. 涙と月の砂糖菓子
3. 秘密の調べと狐の金平糖
4. 椿の花が落ちるころ
5. 桜月夜と梅花の夢
6. 花の知らせと小鈴の落雁
7. つながる想いと蛍火の誓い
8. 祭りの夜と青い春の秘めごと
9. 星の導きと今昔の都
10. 黄昏時に浮かぶ影
11. めぐる因果と紐解かれる謎

この2つのシリーズの他に何冊か出ている。双葉文庫の『太秦荘ダイアリー』が3巻目までいったので、これがルールに乗りそうである。ミステリの範疇に納まっていくのか、枠からはみ出してしまうのかは、今のところよくわからない。まあ、次作を期待しながら…。

海外ミステリ

この1冊・連載10

A・A・ミルン「赤い館の秘密」

私がミステリを読み始めた一番初

期のころに読んだ一冊。創元推理文庫。赤い色の表紙が懐かしい。『クマのプーさん』でおなじみの、アラン・アレキサンダー・ミルンの書いた唯一の長編ミステリ。1921年の作。イギリス。15年振りに赤い館に帰ってきた兄が殺され、当主の弟が消失。2人の素人探偵が推理するストーリー。一番の魅力となっているのが「巧みなトリック」で、英国伝統の本格派推理ものとなっている。

イギリスと言えば、クロフツが書き始めたのも、クリスティが書き始めたのも、この『赤い館の秘密』とほぼ同じ時期であり、ノックス、パークリーなどもこの時期。少し後のディクソン・カーやアメリカの本格もの黄金期に結びつく大切な役割を担ったのがこの本だとも言える。